城西国際大学紀要　第29巻　第２号　2021年３月　101-115

〈研究論文〉

日中観光翻訳におけるアダプテーション
――「忠実」への検討を兼ねて[1]

宮　　偉

【要旨】

日中観光翻訳の現場では、原文の内容を漏れなく訳すという「逐語訳」が、原文に対して「忠実」であろうという理由でよく取られている。ところが、この忠実そうに見える逐語訳は、訳文の読者である観光客を無視してしまい、観光翻訳の目的の実現を妨げることになりがちである。本研究は、日中観光翻訳の実例を挙げ、そして機能主義的翻訳理論を援用して、削除や要約を手段とするアダプテーションの必要性や原則を述べた上、アダプテーションこそ翻訳における「忠実」であることを論じた。

キーワード：逐語訳、忠実、アダプテーション

１．はじめに

観光業は、成長性が高く、また波及効果の裾野の広い産業として世界的に注目されている。日本は、早くも 2003 年に「観光立国懇談会」が発足され、その 3 年後の 2006 年に「観光立国推進基本法」が成立し、外国人観光客の誘致に力を入れている。2003 年に始まった「ビジット・ジャパン」キャンペーン以降、訪日外国人観光客は増加し続けてきて、2019 年度は 3,188 万人にも達して、平成元年（1989 年）284 万人の 11 倍にもなっている。日本政府はまた、2030 年に訪日外国人観光客 6,000 万人の目標を掲げて、外国人観光客を呼び込もうと躍起になっている。

外国人観光客の誘致にはもちろん、外国人のための環境整備が必要になってくる。その中の一環としては、多言語対応がある。訪日外国人にとって最大の問題ともなりうるコミュニケーションという障壁を取り除くには、観光関連施設における多言語対応がいかに重要かは言うまでもなく、日本の観光立国目標の実現に関わる一大要因ともなっていると言えよう。

日本は、2014 年に国土交通省観光庁によって「観光立国実現に向けた 多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」が公開され、多言語対応を重視する姿勢を示している。それでも、外国人観光客が滞在中に困ったこととして、観光庁が 2017 年から 2019 年の三年間で連続して実施したアンケート調査によると、「多言語表示の少なさ・わかりにくさ（観光案内板・

地図等)」は、「施設等のスタッフとのコミュニケーションがとれない」、「無料公衆無線 LAN 環境」と並んで、三位内に入っている。

本研究では、特に博物館における解説パネルの中国語訳を例にし、その「わかりにくさ」の原因ともなる観光資料の外国語翻訳の問題点をめぐって、その解決策を論じようとする。

２．観光翻訳に対する先行研究

日本語には「観光・旅行分野の翻訳」という言い方があるが、「観光翻訳」という言葉がない。それに対して中国語では、「旅遊翻訳」が既に翻訳の一分野を表す術語として定着していて、「为旅游活动、旅游专业和行业所进行的翻译（实践），属于专业翻译（観光活動、観光専門・業界のために行われる翻訳（実践）であり、専門的翻訳に属する［筆者訳］[2]）」（陳剛 2010：11）と定義され、観光パンフレット、案内サイン、解説パネルなど観光と関係する文章に対する全ての翻訳活動を指すことができる。本研究では便宜上、「旅遊翻訳」の直訳として「観光翻訳」を使う。

観光翻訳に対する研究は、日本では殆ど見られないのに対して、中国では盛んに行われている。

学術雑誌掲載論文をはじめとする各種データベースを収録している中国学術情報データベース（CNKI）に、「観光翻訳（translation+tourism）」をキーワードに検索してみると、学術誌に掲載された論文は 603 本も出た。年度別に見ると、早くも 20 年前の 2000 年から観光翻訳関係の論文が発表され始め、2000−2005 の 6 年間に 16 本、2006−2010 年の 5 年間の 91 本に対して、2011−2015 年の 5 年間は 283 本、2016−2019 年の 4 年間は 213 本となり、特に 2011 年からの研究が爆発的に多くなり全体の 8 割以上も占めて、最近 10 年間来中国における観光翻訳研究熱が見て取れる。そして研究内容は、とある観光スポットの外国語誤訳例を分析し、関係翻訳理論を援用して観光翻訳において取るべきストラテジーや技法を論じるものが殆どである。その援用される翻訳理論は、機能主義的翻訳理論や中国学者によって考案された生態翻訳学理論（Eco-Translation Studies）、変訳理論（Translation Variation）その他となっている。

中国における観光翻訳に対する研究は、語種から見ると殆ど中国を中心とする中英翻訳に集中しているのが特徴になっている。中日翻訳に関する論文は、「景点中的日译规范问题——以杭州市为例（観光スポットにおける日本語訳規範問題——杭州市を例に）」（胡丹・翁麗霞 2010）、「论纽马克翻译理论在旅游日语文本翻译中的应用——以吉林旅游官方网站日语文本为例（観光資料の日本語訳におけるニューマーク翻訳理論の応用——吉林観光公式サイトの日本語訳を例に）」（孟奕彤 2018）、「绍兴市旅游公示语汉日翻译的现状调查（紹興市観光案内サイン日本語訳の現状調査）」（秦石美 2014）など、6 本しかない。日本の立場からの日中翻訳に関する研究は、もちろんないのである。

そして中国には、以上のような研究論文以外に、観光翻訳を扱う学術著書もかなり見られ

る。『旅遊翻訳』（陳剛［2014］浙江大学出版社）『現代旅遊翻訳理論研究与公示語翻訳策略』（王欣［2019］東南大学出版社）『文化透視下的旅遊翻訳研究』『張俊［2019］中国紡績出版社』『旅遊翻訳理論与実務』（程尽能・呂和発［2008］清華大学出版社）『旅遊翻訳』（趙友斌［2018］外語教学与研究出版社）『跨文化旅遊翻訳』（金恵康［2006］中訳出版社）などがあり、観光翻訳研究に対する重視が窺える。

どうも観光翻訳研究のブームが終わらないようである。しかし、逆に言うと、まだまだ観光翻訳研究の余地があるとみていいだろう。翻訳は、翻訳共通の一面がある一方、それぞれの言語による独自の特徴があるのは言うまでもないことである。日中翻訳でも、他言語との間の翻訳と違って、特に気をつけるべき特別な事情がある。一衣帯水という近隣関係、2000年以来の交流を持つ中国と日本は、文化的に共通点が多いと思われがちで、「同文同種」とまで言われているが、本当は大平正芳元首相が言ったように、お正月と大晦日であり、近いようで全然違うのである。言語的にも、漢字の共同使用は、確かに相互理解を簡単にできそうに見えても、真の理解を阻害し、むしろ誤解の根源にもなると考えられる。日中翻訳の現場を見てみると、漢字の共同使用が原因でどうしても日中翻訳時に「移植／借用」が多用されることになるが、漢字の存在こそ厄介なものでしかないと思われる事例はいくらでもある。江戸東京博物館の解説パネルにある「疎開児童」という言葉を、そのまま中国語に「疏散儿童」と移植/借用することができて便利そうに見えるが、日本語の「児童」は、スーパー大辞林によると「普通，小学校に在学する者」を指し、つまり「小学生」であり、中国語の「児童」と意味範囲が異なっている。「同形」が故に「異義」が無視されるというようなケースがあまりにも多い。

日中翻訳においても、日中観光翻訳に関する研究はまだ少ない。宮（2018:3）の研究では、日本東京都台東区観光課作成の「総合観光ガイドブック」に対する考察を通して、日中観光翻訳には、「逐語訳と文化語彙の対応」という二つの問題点があると指摘した。「逐語訳」はつまり「原文中の一語一語を忠実にたどって漏れなく訳すこと」であり、そして「文化語彙の対応」は、日中間漢字の共同使用によるそのままの移植を主な手段とする文化語彙処理上の問題を指している。逐語訳や文化語彙の移植は、結局訳文読者としての訪日中国観光客の理解困難や過大負担を招き、ガイドブックとしてうまく機能できたとは言えない。筆者がその後行ってきた、日本の国立歴史民俗博物館や江戸東京博物館の解説パネルの中国語翻訳に対する考察においても、同じような傾向が見られる。

ところが、これは決して翻訳者の理解や表現の力不足によるものだけではない。「総合観光ガイドブック」にしても、国立歴史民俗博物館や江戸東京博物館の解説パネルの翻訳にしても、ほとんど誤訳が見られず、翻訳者の素晴らしい言語能力が垣間見える。逐語訳の本質は、原文に対する「忠実」にある。原文に忠実でなければならないという強迫観念に囚われ、あるいは翻訳に対する「不実」と思われかねない恐怖感からそのような訳出が生まれたのではなかろうか。

国際翻訳者連盟（International Federation of Translators）が 1963 年に作成し 1994 年に修正した「翻訳者憲章」にも書いてあるように、「正しい翻訳を逐語的翻訳と混同しないでください。翻訳の忠実性は、人々が他言語で元の形式、雰囲気、深層の意味を体験できるようにするために、必要な変更を排除しないためです。（原文英語、訳は筆者）」。観光翻訳する時は、逐語訳という強迫観念を捨てて、情報の取捨選択を大胆にしながら翻訳手法を柔軟に取る必要がある。本研究では、読者のための翻訳という視点に立って、観光行動における読者の目的、読者の行動パターンを分析した上、観光翻訳におけるアダプテーションの必要性、原則を検討し、翻訳における「忠実」を兼ねて論じようとする。

３．翻訳におけるアダプテーション

アダプテーションは、英語「adaptation」からの外来語で、『精選版　日本語国語大辞典』の解説によると、「適合。適応。順応。特に動物が外界の変化などに対応して変わっていくこと」と、「映画、音楽、小説などにおいて、もとの作品をそれぞれの目的に適するように改作・脚色すること」であり、そのコアの意味は「適応」「順応」にある。

翻訳におけるアダプテーションは、日本語では「翻案」ともいうが、大辞典解説の二番目「もとの作品をそれぞれの目的に適するように改作・脚色すること」に当たり、「原作が翻訳される過程で、異文化的要素が変更されたり省略されたり、あるいは新たな表現が追加されたりすること」（モナ・ベイカー＆カブリエラ・サルダーニャ 2013：2）を指して、訳文を目標言語文化に「適応」「順応」させることと見られる。また、アダプテーションは、中国の翻訳研究界において「翻訳の適応選択理論」や「変訳理論」のように翻訳理論と見られる場合もあるが、本研究では、翻訳の一「ストラテジー」として位置付ける。

原作に対する「変更」「省略」「追加」などは、原作や原作者に対する「侵害」「破壊」「不実」と見做され、原作に「忠実」であろうという伝統的翻訳論から除外されないこともない。

ところが、そもそも翻訳とは何か。

翻訳は、原語文化に根ざした原文を、目的言語文化に移植する過程であり、言語レベルにおける異文化コミュニケーションとも見做される。そして、翻訳者は原作の読者であると同時に、訳文の作者でもあり、原作者・原作と訳文読者との間の「仲介者」である。自国の言語文化という烙印を押されている翻訳者は、異言語文化の産物である原文に対してまず、自言語文化や対象言語文化その他複雑かつ動的な要素から構成されているフィルターを通して「理解」し、そして訳文読者の言語文化背景を配慮しながら訳文を「産出」しようとする。その「理解」と「産出」を繰り返しての翻訳プロセスにおいては、原文に対する意識的・無意識的ないかなる「変更」はむしろ当たり前である。カタリーナ・ライス＆ハンス・ヨーゼフ・フェアメーア（2019：123-124）では、「ST（筆者注：原文）と TT（筆者注：訳文）の関係は、…、基本的に、ST の価値集合 X が TT の価値集合 Y によって表現されるのであるが、それに

は加わるものも失われるものもある」し、「TT 受容者に提供される情報が、ST 受容者に提供される情報と異なる。従って、同等の質、あるいは可能な限り同等の量の情報を提供するということは、翻訳者にとって不可能であるし、そのように試みることもないだろう。」と主張する。「忠実」はもし原文に対する形式から内容までの「一致」だと見られるなら、この種の「忠実」はむしろ幻想でしかないと言えよう。

４．訳文受容者の視点から見るアダプテーション

20 世紀 70 年代、等価翻訳理論の枠組みを脱出し、翻訳理論研究の中心を原文志向から訳文志向へと移るという、いわゆる機能主義的翻訳理論が台頭してきた。「グローバル化の時代にあって異文化間コミュニケーションが増大する中、多様化する翻訳現象の現実に即した理論だとも言え」（モナ・ベイカー＆カブリエラ・サルダーニャ 2013：87）る機能主義的翻訳理論は、翻訳は目的を持った異文化間の行為だと定義し、翻訳を決定するのは、原文でもなければ原著者の意図でもなく、「これから作ろうとしている TT が、どのような目的で必要とされているのか、どのようなテクストとして作成されることが求められているか」であり、原文は訳文のための情報提供でしかないとも主張している。「ST への忠実さを否定する理論では決してない」が、「翻訳の目的によっては、ST への忠実さが優先順位の下位に位置付けられることも、同様の正当性を持って容認され」、「翻訳の目的や想定読者といった要因が重要な役割を演じる」（藤濤文子 2007：29-30）ことを強調する理論である。

以下、観光翻訳で特に重要な役割を演じる「観光翻訳の目的」と「想定読者」について分析する。

一口に観光翻訳といっても、その目的や種類によって異なる。観光サイトや観光パンフレットのような文章の目的は、読者への「情報伝達」と読者の購買「行動喚起」にあるが、博物館・美術館にある解説系文章は、「情報伝達」を主目的とする「情報型テクスト」と見ていいだろう。情報型テクストは、情報をそのまま「忠実に」伝えることが望ましいようであるが、原文読者と言語文化的に異なる背景を持っている想定訳文読者（受容者）のことを考慮しないといけない。受容者の言語文化、思考様式、認知能力、期待心理など動的要素を総合的に考慮する能力が訳者に求められる。訳文は、原文の内容や形式をそのまま漏れなく訳されたものでなくて、原文が「伝えようとする」内容、つまり原文の意図が反映されるものでなければならない。そのためには、原文読者と訳文読者についての十分な分析が必要である。黄忠廉（2002：67）が指摘しているように、「读者在制约译者活动的各种因素中居于首要地位，起着决定性的作用（読者こそ、訳者の翻訳活動を制約する諸要因における一番の要因であり、決定的役割を果たす）。」観光翻訳をするとき、まず何よりも大事なのは、その訳文の読者を徹底的に分析することなのである。

まず注目すべきは、観光翻訳の読者・訪日外国観光客の目的、動機である。

観光は、その根本的意味は日常を脱することにある。観光、特に海外観光の動機は、その観光客の年齢や性別、旅行経験等によって異なるが、一般的観光客に共通してみられるのが、「リラックス動機」と「刺激（興奮）動機」であろう。特に海外観光に出かける訪日外国人は、母国と異なる日本の自然、歴史、文化、社会に興味を持って、いわゆる「異文化体験」による刺激が大きな動機付けになるだろう。株式会社三井住友銀行コーポレート・アドバイザリー本部企業調査部が 2019 年 6 月に発表した「訪日外国人旅行者（インバウンド）の動向」にも、「訪日目的では、ショッピング、観光、温泉・旅館のほか、日本食や日本の歴史・伝統文化体験などが上位に挙がっており、日本独自のコンテンツが引き続き好まれる傾向にあります。」とあって、「日本独自のコンテンツ」という異文化体験が、訪日外国観光客の主な目的の一つになっていることが伺える。そういう意味では、観光翻訳も、訳文の読者である外国人観光客の異文化体験という目的・動機を満足させなければならない。そのためには、原文寄りの「異化訳」がまず考えられるはずである。日中観光翻訳で言うと、日本の言語文化的情報を、中国人読者である観光客に、そのまま移植して伝えいいということになるだろう。

ところが、観光客の「リラックスしたい」という動機をも無視してはいけない。受容者に処理しきれない過度な異文化情報の提供は、観光客に負担をかけることになったり、誤解を招いたりして、観光客を遠ざける結果をも起こしかねない。

また、観光客の行動パターンにも注目すべきである。呂和発・蒋璐（2013:63-69）によると、観光客の中では、急ぎ足でざっと見て回る人は 8 割を占めるのに対して、じっくり時間をかけて鑑賞見学する人は 2 割しかない事実が分かる。また、博物館等文化施設の解説系文章に対する観光客の読み方は、斜め読み、飛ばし読み、推測読みをはじめとする速読が主流となっていて、そのうちスキャンのように瞬時に数行の文字情報を読み通しながら、必要な情報だけを取り出す読み方「スキャニング（scanning）」が最も利用されているとの研究成果もある。訳文による情報提供も、観光客のこういう行動パターンを考えあわせて、読みやすさや分かりやすさを考慮する読者寄りの「同化訳」も大事となる。

異化か同化かという難しい選択に立たされている観光翻訳は、観光客のリラックス動機や刺激動機など動的要素を十分に考慮し、バランスよく情報を伝達する工夫が必要である。その意味では、往々にして逐語訳になりがちな日中翻訳現場では、訳文を目標言語文化に「適応」「順応」させるアダプテーションを、大胆に取る必要が出てくるだろう。

５．アダプテーションの手段から見る「忠実」

アダプテーションは、「転写、省略、拡張、エキゾティシズム、更新、状況・文化の適応、創造」等を手段とする。

表 1　アダプテーションの手段

手段	解釈
転写	ST の一部を SL のまま写し取り、大抵はそれに直訳をつける。
省略	ST の一部を削除・暗示化する。
拡張	ST の情報を本文や序・脚注・語注釈で明示化（⇨EXPLICITATION）したり追加したりする。
エキゾティシズム	ST 特有の表現であるスラング、方言、ナンセンス語などを TL の大凡の等価物に置き換える（斜体や下線を施すこともある）
更新	古い情報や不明瞭な情報を新しい等価物に置き換える。
状況・文化の適応	ST で使われた文脈を、目標読者に身近で文化的に適した文脈に作り替える。
創造	ST を全体的に置き換えて、本質的なメッセージ、着想、機能だけを保持する。

（モナ・ベイカー＆カブリエラ・サルダーニャ（2013）『翻訳研究のキーワード』P6 により作成）

以上挙げた手段のうち、「転写」「拡張」「エキゾティシズム」「更新」などが、「局所的アダプテーション」として、むしろ翻訳の現場で日常的に使われている。本研究では、特に博物館の解説パネルの翻訳に当たって、伝統的忠実性の視点から抵抗が多いだろうという「省略」、「創造」について、江戸東京博物館の解説パネルにある実際の日中翻訳例を挙げて分析する。

まず「省略」を見てみよう。

例 1：　江戸の庶民は、各地からもたらされたさまざまな風習や季節の行事を取り入れ、災害や病気の流行に直面しながらもたくましく日々の生活を送っていた。多くは長屋住まいで、一つの部屋で家族全員が暮らし、井戸や雪隠などは共同利用であった。薄い壁でプライバシーもないような窮屈な住環境ではあったものの、住民の助け合い精神が育まれた。落語にみる「熊さん、八っつあん」の世界は、このような日常から生まれたものである。庶民の生活は概して質素であったが、長屋住まいでつちかわれた都市生活の知恵は江戸独自の生活スタイルをつくり上げた。

原訳文：江户的平民，吸收了各地风俗与节庆活动，在不断与灾害，流行病等的抗争过程中，顽强而乐观地生活在这里。大多数平民住在“长屋”（长筒型木制单层构造，多户入住,共用外墙,内以木板隔开），一家几口同住一室，水井、厕所等均为共用。单薄的墙壁毫无隐私可言，蜗居于方寸之间，培养出居民间互助友爱的精神。落语中“熊五郎与八五郎”的小故事，正是诞生于这种日常生活。平民的生活大多朴素贫困，长屋生活所形成的城市智慧，成就了江户特有的生活方式。[3]

上例は、江戸の庶民の暮らしぶりについて、「長屋住まいで」「窮屈な住環境ではあったものの、住民の助け合い精神が育まれた」という趣旨の文章である。原訳文は、ほぼ完璧に逐語訳してある。ところが、「落語にみる『熊さん、八っつあん』」を「落语中“熊五郎与八五郎”的小故事」にいくら立派に訳しても、まず中国人読者には「落語」はどんなものかがわからないし、「熊さん、八っつあん」はどんな物語かも知らないので、かえって困惑してしまうだろう。「熊さん、八っつあん」の内容を加筆説明するのも考えられるが、解説パネルにはスペースの限りがある上、観光客がそこまで時間をかけて見学勉強することが考えられないので無理がある。「落語にみる『熊さん、八っつあん』」は、原文の趣旨から考えると、「薄い壁でプライパシーもないような窮屈な住環境ではあったものの、住民の助け合い精神が育まれた」ことの一例として挙げられているだけなので、読者の言語文化的背景を考慮しその読みの負担を軽減させる視点から、中国語に訳す場合、「落語にみる『熊さん、八っつあん』の世界は、このような日常から生まれたものである。」の一文を省略・削除しても全く問題がない。

例 2　：近世の服装は庶民を中心に発達し、現在の和服の原型ができあがった。とくに職人や商人の間では、袢纏・法被などの機能的な仕事着が定着し、職業に応じてさまざまな形や意匠でつくられた。

原訳文：近代的服装以庶民为中心得以发展，形成了现代和服的原型。尤其在匠人与商人之间，袢缠、法被等具有功能性的工作服装成为固定穿着，按各职业特点加以各种样式与设计。

上例は、「歴史の時代区分の一。中世と近代の間の時期。日本史では，後期封建制の時期の安土桃山・江戸時代をいう」（スーパー大辞林）日本語の「近世」を、安易に「中国語では 1840 年アヘン戦争から 1919 年五四運動を指すことが多い」（超級クラウン中日辞典）中国語の「近代」に訳すほか、申し分のない逐語訳である。ところが、「袢纏・法被」をそのまま中国語の漢字にして訳しても中国人読者には到底わかってもらえないだろう。「袢纏・法被」を紹介するような文章ではないし、「機能的な仕事着」の代表例であるので、中国語に訳す時「袢纏・法被など」を省略・削除してもいいだろう。

原文に忠実になれという伝統的翻訳倫理の束縛で、中々原文の内容を省略・削除できない

訳者が多いが、読者の言語文化的背景、目的及び行動パターンなどを総合的に考えると、大胆に行うことも必要であろう。

次は、「創造」について考えてみよう。

「創造」は、原文を情報提供のものとしか見ず、原文の主旨を十分汲み取ってそれを保持した上、訳文読者の言語文化知識を考慮しながら、原文の内容を要約したり語順や文章の構造を調整したりして、訳文読者に分かりやすい訳文にするプロセスを指している。

例 3：　1657 年（明暦 3）正月 18 日の昼すぎ、本郷丸山町の本妙寺から発した火事は、激しい北西風にあおられ、湯島から駿河台、日本橋、佃島、石川島に延焼し、浅草の米蔵や木挽町に及び、19 日の未明に鎮火した。ついで 19 日の昼前、小石川新鷹匠町の武家屋敷から出た火は、竹橋付近から江戸城に移り、天守・本丸・二丸・三丸を焼き、周辺の大名・旗本屋敷を焼き尽くした。さらに同日の夕刻、麹町五丁目の町屋から出火し、外桜田、西丸下、愛宕下から芝口まで延焼し、20 日の朝にいたってようやく鎮火した。

原訳文：1657 年（明历 3 年）正月 18 日午后，发生于本乡丸山町本妙寺的大火，在猛烈的西北风吹拂下，从汤岛蔓延至骏河台、日本桥、佃岛、石川岛，殃及浅草的米仓与木挽町，直到 19 日黎明，大火才被扑灭。紧接着 19 日午前，在小石川新鹰匠町的武家宅邸燃起大火，火势从竹桥附近蔓延至江户城，将天守阁、本丸、二丸、三丸尽皆烧毁，并将周围大名、旗本的宅邸付之一炬。之后，在同一天的黄昏时分，麴町五丁目的町屋又发生火灾，大火从外樱田、西丸下、爱宕下蔓延到芝口，直到 20 日早上才被扑灭。

上例は、江戸城によく起きる火災の一例として「明暦の大火」を紹介する文章である。原文では、「本郷丸山町」「湯島」「駿河台」「日本橋」「佃島」「石川島」「浅草」「小石川新鷹匠町」「竹橋」「麹町五丁目」「外桜田」「西丸下」「愛宕下」「芝口」など江戸城の地名をはじめとする文化語彙があまりにも集中的に出ている。東京に詳しい人ならわかるかもしれないが、一般の日本人でも読み進まないだろう。この文章は、明暦の大火をはじめとする大火事によく襲われる江戸城のことを紹介するものなので、日本の歴史や地名など分からない中国人読者のために、内容を要約して創造的に訳すがいい。「1657 年（明历 3 年）正月 18 日午后，发生于本乡丸山町本妙寺的大火，在猛烈的西北风吹拂下，蔓延至周边大部，直到 19 日黎明，大火才被扑灭。紧接着 19 日午前，在小石川新鹰匠町的武家宅邸燃起大火，将江户城及周围府邸几近烧毁。之后，在同一天的黄昏时分，麴町五丁目的町屋又发生火灾，直到 20 日早上才被扑灭。（1657 年（明暦 3）正月 18 日の昼すぎ、本郷丸山町の本妙寺から発した火事は、激しい北西風にあおられ、瞬く間にその周辺地域に延焼し、19 日の未明に鎮火した。ついで 19 日の昼前、小石川新鷹匠町の武家屋敷から出た火は、江戸城やその周辺の屋敷を殆ど焼き尽く

した。さらに同日の夕刻、麹町五丁目の町屋から出火し、20 日の朝にいたってようやく鎮火した。)」のように、難しい地名を削除して、内容を要約する方が、読者に趣旨を伝えるだけでなく、読者の読みの負担を軽減させ、解説パネルの目的も果たせることになるだろう。

また、原文の主旨を十分汲み取った上、中国人観光客が慣れているだろうという文章の構造に従い、語順を調整したりして訳文を創造する手段も考えられる。

例 4：　江戸時代からたびたび洪水に襲われていた東京には、河川沿岸が水上輸送に便利であることから、その活用がすすんだ。南足立郡、北豊島郡、南葛飾郡（現在の足立区、板橋区、北区、荒川区、墨田区の一部）の隅田川沿岸では、都市化の進行とともに、年々水害の規模が大きくなっていった。

原訳文：从江户时代起就经常遭受洪水袭击的东京，河川沿岸极具水利运输之便，因此广为利用。南足立郡、北丰岛郡、南葛饰郡（现足立区、板桥区、北区、荒川区、墨田区的一部分）的隅田川沿岸，随着城市化进程加快，水患的规模逐年扩大。

上例は、「水害都市東京」を紹介する文章であるが、「南足立郡、北豊島郡、南葛飾郡（現在の足立区、板橋区、北区、荒川区、墨田区の一部)」など集中して出ている地名を削除した上、前後の論理的関係を考えて、中国語文章の書き方に従い文章を再構成することが可能である。

「东京水上交通发达，河川沿岸得以开发利用，但同时自江户时代开始便屡遭洪水灾害。东京最大的河流隅田川沿岸更是如此，随着城市化进程加快，水患的规模逐年扩大。(東京は水上交通が発達しているので、河川沿岸が開発活用されている。と同時に、江戸時代から頻繁に洪水に襲われていた。東京にある最大河川隅田川の沿岸は特に、都市化が進むにつれ、その水害の規模が年に増してくる。)」のように、中国語訳文では、「東京は水上交通が発達しているので、河川沿岸が開発活用されている。と同時に、江戸時代から頻繁に洪水に襲われていた。」のような文章の主旨をまず訳文の冒頭に持っていって、それから「隅田川の沿岸」をその一例にする。原文の内容を要約した上、語順の調整や文章の構造の再構成をして、訳文受容者である中国人観光客に分かりやすい文章に「創造」する。

もう一例見てみよう。

例 5：　一方、「牛鍋食わねば開化けぬ奴」（仮名垣魯文『安愚楽鍋』）といわれた牛鍋をはじめとして、あんパン、あるいは女性の髪型の束髪など外来文化の和風化もすすんだ。新しがり屋の東京人の庶民意識も手伝って、生活に溶け込んでいったものも少なくない。

原訳文：另一方面，正所谓“不吃牛肉锅，非是开化人”（出自假垣鲁文著《安愚乐锅》），牛肉锅、豆馅面包及女性的束发等对外来文化的和风化改良，也加快了步伐。在新

的生活方式形成过程中，东京人喜欢追求新事物的意识也起到了很大的促进作用。

原訳文は立派な逐語訳となっていて非の打ち所がなさそうにみえるが、中国人読者がまず戸惑うのは、「牛鍋食わねば開化けぬ奴（不吃牛肉锅，非是开化人）」であろう。奈良時代から 1200 年もの間肉食を禁じられてきたという日本の事情が分からない中国人読者には、どうして「牛鍋食わねば開化けぬ奴」と言われるのか、原文に「忠実」なこの訳文をいくら読んでも、納得がいかないだろう。この「忠実さ」のゆえに翻訳の目的はむしろ損なわれることになる。

ここでは、この文章の主旨である「外来文化の和風化が進んだ」を、中国語文章の書き方に従いまず冒頭に持っていって、「外来文化の和風化が進んだ」の例として、「あんパン、女性の髪型の束髪、牛鍋」を取り上げ、そして長い間肉禁食の日本事情を文中に加筆して補足説明したり、「牛鍋食わねば開化けぬ奴」の出所でもある「仮名垣魯文『安愚楽鍋』」を削除したりして、以下のようにできよう。

「另一方面，外来文化的日本化也不断推进，如豆馅面包的出现、女性的束发流行等，此前千百年来不吃肉更不吃牛肉的日本人也开始吃起“和式牛肉锅”，甚至于有了“不吃牛肉锅，非是开化人”这一说法。在新的生活方式形成过程中，东京人喜欢追求新事物的意识也起到了很大的促进作用。（一方、外来文化の和風化もすすんだ。例えばあんパン、女性の髪型の束髪の出現などである。さらに千年来肉を特に牛肉を食べない日本人は『和風牛肉鍋』を食べ始め、『牛鍋食わねば開化けぬ奴』」という言い方さえ現れてきた。新しい生活スタイルが形成していく過程において、新しがり屋の東京人の庶民意識が特に役割を果たした。）」

こういう風に、観光翻訳をする時、原文に基づいていても、訳文読者の言語文化的背景や行動パターンなどを総合的に判断し、情報を取捨選択して省略・削除や要約・創造などの手段を大胆かつ柔軟に取るべきである。読者のための翻訳という視点から考えると、アダプテーションこそ、原文に対する「忠実」と言えないだろうか。

省略や創造などアダプテーションの手段は、日本文化を時間をかけて勉強したいという観光客、あるいは日本言語文化の専門家でもある外国人観光客には物足りないが、賈文波（2004:4）が指摘したように、情報を正確に伝達するという前提において、訳文は「一种文化水平低的读者能看懂，而文化水平高的读者也能接受的语言（文化的素養の低い読者にもわかるし、文化的素養の高い読者にも受け入れられるような言語）」という「共通言語（common language）」を使うべきであろう。

６．アダプテーションの原則

以上、日中観光翻訳におけるアダプテーションの手段を、「省略」や「創造」を中心にして紹介し、アダプテーションこそ原文に対する「忠実」であることを論じてきた。翻訳を、訳者という仲介者を通しての異文化コミュニケーションだと見なしたら、原文読者と訳文読者との間の言語文化的な差異を、仲介者としての訳者は敏感にキャッチし、そして読者の目的等諸要素を総合的に判断した上、その差異を埋めるために、原文の内容を省略したり、補足したり、要約したり再構成したりして、主観的にフィルターを設けて能動的・意図的に介入することが求められる。

ところが、フィルターを「主観的に」設けてはいても、決して「恣意的」にはできない。そのフィルターには、前文と重なるところもあろうが、少なくとも以下のような「判断」を必要とする。

まずは、原文読者と訳文読者の言語文化的背景における差異に対する判断である。

翻訳行為における訳者は、ただ機械的に言語を置き換えるのではなく、異文化コミュニケーションの橋渡しでなければならない。原文に明示的・暗示的にある言語文化的情報をまず敏感に読み取り、そしてその情報が、訳文読者に受容されるかどうか、受容されるとしたらどの程度受容されるかなどを予測する力を、訳者に持ち合わせなければならない。

それから、訳文読者の目的や行動パターンに対する判断である。

原文は原文の読者のためのものであり、訳文はもちろん訳文の読者のものでなければならない。同じ博物館においても、日本人と訪日外国人とでは、興味を持っている部分や必要とする情報が違うはずである。観光翻訳も、訳文読者の立場に立って行わなければならない。観光翻訳で言うと、観光客としての訳文読者は、平均的にどんな読者層なのか、どういう目的でそしてどういう行動パターンを持っているかについて、判断をつける必要がある。前述したように、観光客の「刺激」動機を満すなら異化訳が最適だが、「リラックス」動機となるとむしろ同化訳が必要になるので、観光客の読み習慣をも合わせて考えると、逐語訳を捨ててバランスよくアダプテーションの手段を取った方がいいだろう。

そして、原文中の文化的情報の重要性、独立性に対する判断である。

原文に含まれる文化的情報は、場合によってはいくら難解でも、削除や要約での処理が通用せず、そのまま訳文に移植しなくてはならない。それは、その文化的情報は特に重要であり、独立性が高いあるいはコア概念である場合である。

以下の例を見てみよう。

例６：庶民向けの小説類のうち、上方から江戸に文学の中心が移ってからのものを、一般に「戯作」と呼び、その作者を「戯作者」と称する。戯作は草双紙・洒落本・談義本・滑稽本・人情本・読本などの総称で、江戸特有の文学作品である。草双紙は通

俗的な挿絵本で、赤本・黒本・黄紙・合巻へと順次に展開し、明治前期に及ぶ。赤本・黒本は子供向けでお伽噺などを題材としたものが多いが、黄表紙になると大人向けとなり、風俗描写や風刺性を含み、さらに合巻になると筋が複雑化し内容も膨張したため、数冊が合冊される形となった。庶民の読みもののうち、洒落本は遊里を舞台として、通の理念を示したものである。滑稽本は笑いを目的としたもので、そのうち教訓性の強いものを談義本と呼ぶ。ほかにも、男女の情愛を描いたのが人情本で、文章を主軸とした伝奇的内容の小説を読本というような区分があった。

以上の文章は、庶民の読み物の種類を紹介するのがその主要目的なので、「草双紙・洒落本・談義本・滑稽本・人情本・読本」などの文化語彙は、内容的には重要であり独立性が高いので、いくら中国人読者に難解でも、その語彙自体をそのまま移植する必要が出てくる。

ところが、独立性が低減すると、難解な文化語彙を削除したりしてアダプテーションをとってもいいだろう。以下の例を見てみよう。

例 7：吉原は幕府公認の遊郭として都市・江戸の成立とともにおこり、幕末の動乱期を除き、約 3〜6 千人余りの遊女がいた。華やかな妓楼では贅を尽くした遊興が、着飾った遊女たちを相手に日夜くりひろげられた。遊女の身なりは流行の先駆けともなり、そのすがたは浮世絵の好画題であった。また、吉原は洒落本など多くの文芸作品や歌舞伎にも取り上げられ江戸独自の文化の形成に大きな役割を果たした。

同じ「洒落本」という文化語彙が出ているが、吉原という遊郭を紹介する文章の中にある「洒落本」なので、その独立性や重要性が低くなり、読者の負担を軽減させる立場から考えると、削除しても全く差し支えないだろう。

7．結びに

機能主義的翻訳理論では、翻訳を目的のある異文化コミュニケーション行為だとみなしている。異文化コミュニケーションを成功させるために、エンパシー（感情移入）力が提示されているが、特殊な異文化コミュニケーションの一形態とされている翻訳行為にも、原文（原作者）の意図を十分汲み取りながら、訳文読者をよく分析した上翻訳する力が求められている。

ライス＆フェアメーア（2019：82,101）が指摘しているように、「全ての翻訳は、意図された読者に向けられている」し、「ST を、目標受容者の期待を考慮しながら機能的に転移しなければならない。」翻訳という特殊な異文化コミュニケーション行為では、受容者としての訳文読者が一番に考えなければならない要素である。

翻訳者は、原文の読者であり、訳文の作者でもある。原文の意味、主旨、目的を慎重に見

極めた上、訳文読者の言語的・文化的予備知識を把握し、あるいは省略、あるいは要約などして、大胆な「アダプテーション」を徹底的に貫いていくことがむしろ不可欠である。アダプテーションこそ、翻訳行為に対する「忠実」ではなかろうか。

そのためには、翻訳者の「意図的介入」が必要になってくる。全ての情報を漏れなく伝達しようとすると、受容者が処理しきれないのでフリーズしてしまうのである。翻訳者には、雑多にある情報を取捨選択して読者に伝える勇気と技術が求められている。

【注】

[1] 本研究は、2019 年の学長所管個人研究費の成果物である。

[2] 括弧内の訳は全て筆者による。

[3] 本研究に挙げられた全ての例文は、江戸東京博物館の解説パネルにある日中翻訳実例である。なお、下線は全て筆者による。

【参考文献】

陳剛（2010）『旅遊翻訳与渉外導遊』中国出版集団中国対外翻訳出版公司

宮偉（2018）『浅析日漢旅遊翻訳中的問題及策略』日中翻訳文化教育研究 No.3

藤濤文子（2007）『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』松籟社

モナ・ベイカー＆カブリエラ・サルダーニャ（2013）『翻訳研究のキーワード』研究社

カタリーナ・ライス＆ハンス・ヨーゼフ・フェアメーア（2019）『スコポス理論とテクストタイプ別翻訳理論』晃陽書房

呂和発・蒋璐（2013）『景点解説翻訳的跨文化詮釈』中国対外翻訳出版有限公司

黄忠廉（2002）『釈“変訳”』外語研究

賈文波（2004）『応用翻訳功能論』中国対外翻訳出版公司

ウェブ検索：

日本政府観光局公式サイト https://www.jnto.go.jp（2020.3.6 アクセス）

中国知網 http://cnki.net（2020.2.29 アクセス）

https://www.fit-ift.org/translators-charter/（2020.3.5 アクセス）

https://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000267.html（2020.2.2 アクセス）

Adaptation in Japanese-Chinese Tourism Translation:
On the "Faithfulness" of Translation

Wei Gong

Abstract

In the field of Japanese-Chinese tourism translation, the word-for-word translation method is often used to ensure faithfulness to the source text. However, this method only appears to be faithful because it tends to ignore tourists who are the readers of the translated text, and thus it may not achieve the purpose of tourism translation. Based on a case study on a real-life example of Sino-Japanese tourist translation and the functionalist theory of translation, this study discusses the necessity and principle of adaptation by means of deletion and summary, and argues that adaptation is the essence of fidelity in translation.

Key words: word-for-word translation, faithfulness, adaptation